
発達理論の学び舎

Back Number: Vol 252

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」



目次

- 5021. 【日本滞在記】魂の安息:今朝方の夢と昨日のビジョン
- 5022. 【日本滞在記】今朝方の夢の続き:両親の食生活の改善を見
- 5023. 【日本滞在記】人生最良の夕食:日々即波・日々即大海・日々即幸福感
- 5024. 【日本滞在記】本日のボルダリン
- 5025. 【日本滞在記】縁と祈り
- 5026. 【日本滞在記】良質な睡眠を支える枕と布団敷:今朝方の夢に
- 5027. 【日本滞在記】家族の支え合いと父のこだわり
- 5028. 【日本滞在記】穏やかな平日の朝にくつろいで
- 5029. 【日本滞在記】手料理に吹き込まれる生きた魂
- 5030. 【日本滞在記】家族の関係性と絆の深まり
- 5031. 【日本滞在記】瀬戸内海を包む闇を眺めながら:今朝方の夢
- 5032. 【日本滞在記】オーロラのように輝く夕焼け空
- 5033. 【日本滞在記】体現され、育まれるゆとり:仮眠中のビジョン
- 5034. 【日本滞在記】直筆に込められた不思議な力を感じる夢
- 5035. 【日本滞在記】瀬戸内海というモチーフ:感覚的未分化の世界の中へ
- 5036. 【日本滞在記】ヌミノーゼ(聖なるもの)との触れ合い
- 5037. 【日本滞在記】今朝方の夢:充実感の予感
- 5038. 【日本滞在記】父が描いた海の絵:花火の風情にさらされて
- 5039. 【日本滞在記】意外性:テオリア・プラクシス・ポイエーシス
- 5040. 【日本滞在記】今朝方の夢:親友たちとボルダリングを楽しんで

時刻は午前5時を迎えた。今私は、実家の山口県にいる。この時間帯はまだ夜が明けておらず、辺りは闇に包まれている。だがその闇は、フローニンゲンでのそれとは異なって知覚される。

闇の奥にある優しさ。今私は、それを感じている。

耳を澄ませてみると、穏やかな瀬戸内海の波の音が聞こえて来る。波は、私が気づいていないところで絶えず寄せては返している。そうそれは、人知れず絶えず寄せては返すものなのだ。

人知れず「進行する」何か。人はそれぞれそうしたものを持っている。一方で私たちは、人知れず「進行させていく」何かを持っているだろうか。日記を綴っていくことと、曲を作っていくこと。少なくともそれらは、人知れず進行させていくものとして絶えず従事していこう。

実家に戻ってからの3日目を迎えたが、この2日間は本当にくつろぐことができている。オランダでの生活や、日本に一時帰国してからの滞在先であった東京、岐阜、大阪においてもくつろぐことはできていたが、実家のくつろぎ具合はその比ではないことがわかる。

自らを育ててくれた場所には何かがある。魂の安息場所としてこの地がある。今日もまた、この絶対的なくつろぎの中で自分の取り組みを前に進めていこう。

この2日間は日記をそれほど執筆せず、そして曲もそれほど作らない生活を送り、とにかくぼんやりと時間を過ごすことをしていた。そのおかげもあって、再び自分の内側に創造活動に励んでいく力のようなものが充満しており、今日からはまた、自分のペースで言葉と曲を生み出していきたい。自分に課せられた重要な役割は、絶えず自分の言葉と曲を生み出していくことなのだから。

実家のベッドと枕が良質なものだからか、快眠が取れている。今朝は3時半に一度目を覚まし、結局4時半前に起床した。明日からは、最初に目覚めた時に起床してしまってもいいかもしれない。

実家に戻ってきてから最初に見た夢について思い出す。夢の中で私は、とても高揚したエネルギーに満ちていた。地元の友人たちと何かに取り組んでおり、それは私にとって初めての事柄か、

あるいは初めてではなかったとしても、それを行うのが初めてであるような新鮮な気持ちがあった。その気持ちを色で表現するならば、オレンジがかった色、あるいは黄色がかった色だと表現できるだろう。その夢に加えて、もう一つ二つ夢を見ていたが、それらについてはもはや思い出すことはできない。ただし、それらの夢もまた肯定的なものであったことは確かだ。

今朝方の夢の感覚を思い出したことによって、昨日の午後の仮眠中の体験も思い出した。仮眠中、私は色鮮やかなビジョンを見ていた。意識がサトル状態に移行することを知覚している自分がそこにいて、それを知覚した瞬間に、目を閉じている内側の世界の中で、多種多様なシンボルが立ち現れ、それがめくるめく速さで現れては消えを繰り返していた。そうしたビジョンの渦が落ち着いた後、自分の右足がピクリと動く現象を体験した。こうした現象は時に経験する。

今日は両足でも左足でもなく、右足だけがピクリと動いた。それはかなり激しい動きであった。この現象が示唆しているものについてはまだよくわからない。だがそうした現象が時々自分の身体に起こるということを書き留め、それと内側のエネルギーの動きや感情の動きとが対応しているのではないかという仮説的なことを記しておく。山口県光市:2019/10/7(月)05:16

5022.【日本滞在記】今朝方の夢の続き:両親の食生活の改善を見て

ちょうど今、偶然にも今朝方の夢の続きを思い出した。そういえば起床直前に、私はロールプレイングゲームの中の世界にいて、数多くの仲間と一緒に巨大な竜の姿をした敵と戦おうとしていた。最初私は、自分を含め、二、三人でその竜と戦おうとしていたのだが、いざ竜の待つ塔の最上階に到着した時、そこに数多くの仲間がいることがわかったのである。塔の最上階は石畳でできていて、色は黄土色だった。空は青く、時間帯は日中のようであった。より厳密に情景描写をすると、竜がいる塔と私たちがいる塔は別のものであり、二つの塔の最上階は、その石畳の道で繋がっていた。私が最上階に到着した時、竜は宙に浮いていて、不敵な笑みを浮かべているように思えた。私を含め、仲間たちは皆、何も怯むことなく、その場に佇んでいた。

全員で一斉に竜と戦うことはできないようであり、竜と戦えるのは三人だけのようにだった。私は率先して戦う意思を表明し、皆よりも一歩前に出た。その後、こちらにも獣の姿をした仲間がいて、その仲

間に加えて、回復の魔法を使える仲間の三人でまずは竜と戦ってみることになった。戦闘が開始した瞬間に夢の場面が変わった。

今回の夢で現れたシンボルは、竜、数多くの仲間——特に印象に残っているのは、獣姿をした仲間と回復の魔法を唱えることができる仲間——、黄土色をした二つの塔であった。それらのシンボルが何を示唆しているのかはよくわからないが、竜も私たちも、お互いを殺し合うというような殺気に満ちておらず、どこか穏やかな気持ちを持っていたように思う。

早朝の爽やかな風。瀬戸内海を優しく通り抜けていく風が心地よく、風の声が聞こえて来る。季節はめっきり秋めいており、家の中を流れていく風はひんやりとして気持ちがいい。

海と山とに恵まれたこの地に滞在していると、改めて空気の澄んだところで生活をしたいという思いを新たにする。食として何を身体に取り入れるかだけではなく、新鮮な空気を取り入れることもまた心身の健康には大切だ。それは思っている以上に大切かもしれない。不食の人たちがエネルギー源にしているのは太陽光と空気だということを思い出すと、なお一層のこと空気の大切さを知る。自然の恵みを感じながら、それを享受させていただく生活。そうした生活を送っていこうという思いを強くする。

まだ日記に書き留めていなかったが、今回2年弱ぶりに実家に戻ってきて一番嬉しかったのは、両親が食生活を抜本的に改め、私と同じぐらいにこだわり抜いた食生活を送っていることである。ちょうど今、父が近くの波止場で海の様子をチェックすることから帰ってきて、これから新鮮な野菜と果物をふんだんに使ったジュースを作ってくれようとしている。生きた酵素がふんだんに含まれたジュースである。

実は父は、昨日水だけの断食をしていた。昨日の私は、昼にバナナを2本食べたが、夕食までに食べた固形物はそれだけであり、夕食は父のこだわり抜いた手料理を食べた。父は、母と私にとっても美味しい夕食を作ってくれながらも、自分は水だけで過ごしていた。父と母が食生活を抜本的に改め、非常に健康的な食生活を送り始めているのは嬉しい限りである。その成果はすでに出ており、今回帰省して二人の顔を見た瞬間に、二人の心身のエネルギー状態が良くなっていることに気づいた。二人の生き生きしている姿を見て、こちらにもまた新たなエネルギーを与えてもらったかのようで

ある。人生を謳歌するには、心身の健康が何より大切であり、それを根幹から支えているのが食なのだ」と改めて思う。山口県光市:2019/10/7(月)05:55

5023.【日本滞在記】人生最良の夕食:日々即波・日々即大海・日々即幸福感

時刻は午前5時を迎えようとしている。今日の瀬戸内海の波の音は、いつもの穏やかさよりも力強さを感じさせてくれる。辺りは真っ暗闇に包まれており、力強い波の音だけが響き渡っている。よくよく耳を澄ませると、虫の鳴き声がしてくる。

人生における最良の日のうちの一つ。昨日を振り返るならば、そうしたことが言えるかもしれない。より厳密に述べるならば、昨夜の夕食は、人生における最良の夕食のうちの一つだったと言える。我が家は常に一家団欒で夕食を摂るのだが、昨日の夕食は団欒を超えて、家族の絆をより一層深めるような夕食だったと思う。

忘れがたい夕食。ここでは詳しく述べないが、よく笑い、そしてよく泣く夕食だった。夕方の5時過ぎから夕食を食べ始め、ゆっくりと話をしていると、気がつけば午後の10時半近くまで夕食を摂っていた。30数年間一緒に過ごしてきた家族にあって、お互いの人生においてまだ知らないエピソードや思いの数々があったことに純粋に驚き、そうしたエピソードや思いを一人一人がその場で共有していく様子は、本当に深い対話のように思えた。いやそれは、魂の交流と言ってもいいかもしれない。

父も母も、そして私も、自らの過去を語り、そして今を語っていった。そこに笑いと涙があるのは必然であったように思う。そうした素晴らしき夕食から一夜が明けた。今もまだ、昨夜の夕食時に包まれた、浄福感がある。そうこれは、自分の内側の何かが清められ、浄化されることによってもたらされる浸透的な幸福感である。

瀬戸内海の波が砂浜に寄せては返し、その跡が砂浜に刻まれていくかのように、その浄福感も自分の内側に確かに刻まれていった。間違いなく、自分の人生の奥深くに浸透していくような幸福感を得られたこと。それに深く深く感謝したいと思う。

人生の新たな一日が再び始まる。昨日の幸福な一日は過ぎ去り、また新しい幸福な一日がやってきた。

現代に生きるすべての人たちが、各々の幸福感を感じながら日々を過ごしてほしいという願い。それ以上に希求するものはない。

寄せては返す波のような幸福感と、波を生み出す大海そのものの中に浸る絶対的な幸福感。そのような幸福感が本当に存在している。昨夜の私はその目撃者であり、体験者であった。そして今もまだそれらの幸福感を感じている自分がここにいる。

日々即波、日々即大海。日々即幸福感。人間の日々は本来そうしたものであり、そうあり続けるべきものなのではないだろうか。山口県光市:2019/10/8(火)05:17

5024.【日本滞在記】本日のボルダリングに向けて

実家に戻ってきてからも生活リズムは変わらず、今朝もまた午前4時過ぎに起床した。そこからオイルプリングを行い、ヨガをして身体を目覚めさせた後に白湯を飲む。その後ゆっくりと青汁を二杯目の白湯に溶かしながら飲むこともまた変わらずに行なっていることである。

銀座に滞在している時に購入した新しいMac Book Airの設定を、ようやく昨日行なった。古いPCからデータを移行させたり、各種初期設定を行うことに昨日の午後の時間を充てていた。実はまだ iCloudが完全に同期されておらず、過去に使っていたフォルダやファイルで使えないものがあり、その問題の解決に向けて今手を打っている最中である。それらの同期が完全になされなければ、古いMacを買い取りに出すことができない。この問題が早期に解決されることを祈りながら、もう少し手を打ってみよう。

実家に戻ってきてからの生活は、ホテルを転々としていた時よりもやはり落ち着いており、とてもリラックスした時間を過ごすことができている。自分がそうした時間を過ごせるように、両親がサポートを惜しまずに行ってくれていることをひしひしと感じ、有り難さと感謝の念で一杯である。

今日もまた、くつろぎの中で自分の取り組みを前に進めていこうと思う。これから早朝の作曲実践に従事したい。今日は、この間まで行われていた完訳出版記念オンラインゼミナールの受講者の方と、山口県の下松市でボルダリングをすることになっている。13時に現地のジムで待ち合わせることになっており、実家からジムまではとても近く、実家を出発するのは12時半前で大丈夫のようだ。

13時から1時間半か2時間弱ほどボルダリングを楽しみ、その後、近くのカフェに行ってゆっくりと話
ができればと思う。今日のボルダリングでは、先日大阪梅田の「アーバンクライミングクラブ カワセ
ミ」のスタッフの方に教えてもらったことを意識しようと思う。具体的には、壁を登っている最中に、身
体のコアないしはインナーマッスルに力を入れ、腕の筋肉を緩めることである。そのスタッフの方曰
く、上級者になってくれば身体の様々な筋肉の弛緩を使いこなしていく技術が獲得されるとのこと
であったが、最初のうちはそれは難しいので、コアにぎゅっと力を入れ、とにかく腕に力を入れすぎ
ないようにしていくことが大切とのことであった。

実際にそのアドバイスを受けた後には、壁が非常に登りやすくなり、それまで苦戦していた課題を
登り切ることができたという経験がある。そうしたことから、今日もまたコアを意識し、そこに力を入
れていくことを意識的に行なっていきたい。山口県光市:2019/10/9(水)06:05

5025.【日本滞在記】縁と祈り

時刻は午後の7時半に近付きつつある。たった今、一家団欒の夕食を摂り終えた。今日の夕食も父
のこだわりの料理が食卓に並び、いずれも見事な味であった。満足感と幸福感の中で食事を摂る
ことができたことに対して感謝の意を捧げる。

今日は午後の1時から、隣の市である下松市で知人の方とボルダリングを楽しんだ。その方とはオ
ンラインゼミナールを通じて縁があり、先日の大阪のセミナーにもご足労いただき、今回はわざわざ
下松市まで来ていただいて一緒にボルダリングを楽しんだ。当初の予定では、2時間弱ほどボルダ
リングを楽しみ、近くのカフェに移動してゆっくりと話をしようかと思っていたのだが、結局4時間ほど
ジムにいて、ボルダリングの合間合間に休憩としてゆっくりと話を聞かせていただいた。

今この瞬間に感じていることを表現する言葉が見つからないのだが、その方と私は共に、何か自己
を超えた大きな存在に絶えず導かれ、それに気付きながら日々を生きていることを感じた。不思議
な縁というのは本当にあるようだ。そして、そうした縁を生み出してくれているものこそ、自己を超え
た大きな存在なのだと思う。それは一見すると奇妙に聞こえるかもしれないのだが、そうしたものが
ありありと存在していると実感しているのだからそうとしか言えない。だから私は毎日それに対して祈

るようにして生活を送っているのだと思う。今夜も祈りを捧げよう。そして明日もまた祈りを捧げよう。今日この瞬間に言えることはそれくらいだろうか。

本日訪れたボルダリングジムについて、そしてそこでの体験についてはまた改めて書き留めておきたい。今はそうしたことを書き留めることに意識が向かっていない。無理をせず、それは明日以降にまた書き留めればよい。今日は本当にその方と一緒にボルダリングを行えたことにただただ感謝したい。もっといい言葉があるように思えるし、今の自分の最奥にあるものはもっと何か別の言葉を待っているようなのだ。その言葉を探ることが今の自分がなすべきことであるように思うし、その言葉と出会うのは次に待つ自分なのだろう。山口県光市:2019/10/9(水) 19:38

5026.【日本滞在記】良質な睡眠を支える枕と布団敷:今朝方の夢

今朝もまたいつもと同じように、午前4時半に起床した。日本に一時帰国してから今日に至るまで、ほとんどの日はこの時間に起床しており、実家に戻ってからは完全に同じ時間に起床することができている。

両親も基本的に一日一食(野菜と果物をジューサーで絞ったジュースを朝に、昼には果物程度を食べ、夜には野菜中心の食事を摂る)生活を送っており、それは私の食生活と瓜二つであるがゆえに、食生活を適応することに関しては何の心配もなかった。

オランダで私が摂取しているものよりも、両親が摂取しているものの方がさらにバランスが良いように思われるため、むしろこちらが学んでいるぐらいである。オランダに戻ったら、食生活に少しばかりテコ入れしようと思う。それともう一つ、快眠を支えているものとして、良質な枕と布団敷きが挙げられると思った。実家で今私が寝ている枕と布団敷は大変優れており、毎日本当に深くて質の良い睡眠がもたらされている。それに感謝の念を持ち、枕と布団敷に何を使っているのかを改めて両親に聞いてみた。

以前実家に帰省した時にも話を聞いていたように思うのだが、今回の帰省において改めて枕と布団敷の効果が際立ったものだと感じたので質問した次第である。枕に関してはテンピュールのものを使っており、布団敷に関してはトゥルー・スリーパーのものを使っているとのことであった。

以前から、ベッドや枕に関しても、良質な睡眠をもたらしてくれるものを購入しようと思っていたのだが、今のところそれを実現させていなかった。確かに枕だけはそれなりのものをこれまで使ってきたが、オランダですでに三年間使ってきた枕は買い替えの時期に迫っていると思う。来年あたりにオランダ国内で引っ越しを考えているため、布団敷の購入は引っ越し後にした方がいいかもしれない。とりあえず、枕のみオランダに戻り次第すぐに購入しようと思う。

食事の質と量、日中の軽い運動、さらには就寝前にどのように過ごすかが睡眠の質に影響を与えるのみならず、実際に就寝してから使う枕と布団敷によって随分と睡眠の質が変わる。今回の帰省はそうしたことを教えてくれた。

今日の瀬戸内海はとても穏やかだ。早朝5時半の今、辺りは真っ暗闇であり、ぼんやりと街頭の明かりが見えるぐらいだ。大都市とは異なり、ここでは必要最低限の明かりしか点っていない。それに対して好感を持つ。暗さを脚色することなく、真に暗さを味わうこと。闇の深さを正面から感じる。それは本当に大切なことである。

瀬戸内海の波の音に耳を傾けながら、今朝方の夢について思い出している。夢の中で私は、小中学校時代に一番背の高かった友人(YK)と、同じ年ぐらいの三人の外国人女性と一緒にボルダリングを楽しんでいた。友人の彼はリーチが長く、それを活かして壁を登ろうとしているのだが、それがなかなかうまくいかない。彼にお願いをされて、ちょっと私が手本を示してみた。

手本と言っても、もっとうまい登り方があるのは承知であったが、自分なりに納得のいく登り方を見せた。すると彼は驚きと喜びの混じった表情を浮かべており、彼の横にいた三人の女性たちも私に教えを求めてきた。そこからは、三人のそれぞれの身体の特徴を考慮した壁の登り方を教えた。そのような夢を今朝方見ている。昨日ボルダリングをしたことが影響してこのような夢を見たのであろうか。この夢については、もう少しぼんやりと考えを巡らせたい。山口県光市:2019/10/10(木)05:30

5027.【日本滞在記】家族の支え合いと父のこだわり

時刻は午前5時半を迎えた。作家、写真家、イラストレーター、料理人、釣り人の父が、毎朝の習慣である海の様子をチェックから帰ってきた。うちの家族は私も含めて午前4時過ぎには目覚めており、先ほど父は近くの海に行き、海の様子を確認するために出かけていた。

父は今、やりたいことがたくさんあるようであり、実際にいくつかのことには着手し始めている。釣りに関しては、これまで少しそれを温存していたようだが、これから釣りに最適な秋の季節となるために、近々また釣りに出かけていくそうだ。

新しいボートを購入する予定とのことであり、文章執筆に関してもやりたいことがある父の姿を見ると、どこかヘミングウェイを思い出す。ボートに乗って、穏やかな瀬戸内海の上で父は何を見て、何を感じ、どのような文章をこれから書いていくのだろうか。想像するだけで、今からそれが楽しみだ。

海の様子をチェックすることから帰ってきた父は、早速母と私のために、新鮮な野菜と果物を使った酵素ジュースを作ることに着手し始めてくれた。今、野菜や果物を切る音がキッチンの方から聞こえてくる。外はまだ闇に包まれているが、キッチンの方から聞こえてくる音は、どこか黄色やオレンジ色に知覚される感覚質を持っている。そこには楽しさや喜びの感覚が内包されており、それが音として飛び出してきているのだ。

音は本当に面白い。音色に内包された感覚質の豊かさには改めて感銘を受ける。

父は昨年退職をし、これまで家族を支えてくれた母が少しでも楽になるように、そして母がピアノの演奏に集中できるように、基本的に料理は母ではなく父が行うことになっているそうだ。二人の助け合いの精神を見ていると、私も家族を持った際に自分がどのような役割を担っていくかについて考えさせられる。買い物に関しても父が担っているようであり、今日は父についていく形で隣町のスーパーに行く。そこで一緒にコーヒー豆を選び、それに合わせて私は自分が食べたい果物を選ぶ予定になっている。

オランダにいる時は、空港のラウンジとかかりつけの美容師のメルヴィンの店で見られるエスプレッソ以外はコーヒーを飲まないのだが、日本に一時帰国しているときは、朝や午後の早い時間帯にコーヒーを少々飲むことがある。

実家では、これまでネスプレッソを使っており、確かにネスプレッソで入れるコーヒーも旨いことは確かだが、ドロップ式の方がさらに香りが引き立ち、味もより一層美味しくなる。父が作ってくれるコーヒーが美味しいと述べていたところ、それでは豆を挽いてコーヒーを作ろうかということになり、豆挽

きを購入し、今日はコーヒー豆を選びに行くことになった。豆を挽くことに関しても父にはこだわりがあり、機械に頼ることなく、自分の手で豆を挽くとのことである。つまり、購入した豆挽きは機械ではなく、すり鉢のようなものなのだ。

コーヒー豆を挽いている時に立つ香りを想像すると、それだけで至福感が湧き出てくる。その香り、そして父が手で挽いたコーヒーの味を忘れることはないだろう。

機械化と効率化が異常なほどに進むこの社会の中にあって、両親の生き方やあり方から愛ばされることは本当に多い。

今、ジューサーが適度な響きを持つ音を上げ始めた。父が作る酵素ジュースがもうじき完成する。その一杯を待つ楽しみが今ここにあり、その一杯を飲む楽しみがもうすぐそこにある。山口県光市：
2019/10/10(木)06:02

5028.【日本滞在記】穏やかな平日の朝にくつろいで

時刻は午前8時半を迎えた。時間という存在の姿が見えないほどに、ゆったりとしたリズムの波に揺られながら日々が進行していく。とりわけ実家に帰ってきてからそのように思う。

昨年に父は退職し、父も母も自分のやりたいことに邁進しながら日々を過ごしている姿を見れて何よりである。二人の表情を見ているだけで、二人が充実した日々を送っていることがわかる。

今日は平日の木曜日なのだが、実家のある光市はそれを感じさせないほどに穏やかである。私がこの街を愛しているのは、機械化され、効率化されてしまった都市が忘れてしまったものがこの街にあるからだろう。そしてそれは、人間性の涵養において本来なくてはならないものだと思う。

山口県もすっかり秋めいてきており、朝晩はとても涼しい。今日は少しばかり気温が上がるようだが、日中においても汗をかくようなことはもはやなく、日本の素晴らしき秋の様相を呈し始めている。

今、部屋の窓を開けていて、瀬戸内海の波の音と小鳥たちの鳴き声を聞いている。もう一時間ほどしたら、父と近くの大きなショッピングモールに行き、そこのコーヒー専門店で足を運び、コーヒー

豆と一緒に選ぶ。買い物に出かけるまでもう少し時間があるので、これからバルコニーに向かい、そこでスタンディングデスクを使い、穏やかな瀬戸内海を一望しながら読書でもしようかと思う。実家は本当に、平穏かつ落ち着いた生活をする上で最高の場所であり、自らの創作活動に打ち込む最良の場所になっている。海もあり、山もあり、その他に何か望むものがあるだろうか。私にはそれは見当たらない。

今日もまた、ゆっくりと自分の取り組みに従事し、それを緩やかに深めていく。瀬戸内海の進行に範を求めて行こう。山口県光市:2019/10/10(木)08:39

5029.【日本滞在記】手料理に吹き込まれる生きた魂

時刻は午後の6時半を迎えた。ちょうど今しがた夕食を摂り終えた。今夜の夕食の父の手料理もまた美味であった。5時半前からゆっくりと夕食を摂り始め、家族三人で会話を楽しみながらご飯を共にする幸せの中に私はいた。

今からは、夕食後の一杯として、父が抹茶を入れてくれる。退職後、母に代わって夕食を毎日作っている父の姿を見ていると、私もいつか家族のために料理を作りたいという思いが自ずから湧いてくる。

そういえば今日は、午後カリタ(Kalita)のコーヒーミルが到着し、それを使って豆を挽いてコーヒーを作った。午前中に父と一緒にショッピングモールに行き、そこで父と話をしながら選んだコーヒー豆を使って入れたコーヒーはとても美味しかった。インスタントやネスプレッソにはない味と香りがそこにあり、何よりも自分の手で豆を挽くという行為によって、作り手の気(あるいは生命エネルギー)のようなものがコーヒーに込められ、それが味に現れることを強く実感した。

機械によって標準化されたものを購入し、それを食べたり飲んだりするのは確かに楽なのだが、そこには大切なものがやはり欠落しているのだと思う。絶えず変化し続けている人間が作るからこそ、そこには味の微細な変化がある。言い換えると、味というものも生き物なのだと思う。料理というのは生命なのであり、手作りによってその生命には魂が吹き込まれる。実家に戻ってきてから父の手料理を毎晩食べているが、それが絶えず美味なのは、そこに生命が躍動しているからなのだと思う。

この時間帯になると、辺りはすっかり暗くなっている。想像するに、オランダもすでにこの時間帯は暗くなっているのではないかと思う。夕暮れに近づく瀬戸内海を眺めながらくつろぎ、引き立つコーヒーのアロマに身を包まれながらコーヒーを飲んでいて時間を思い出す。瀬戸内海の風から運ばれてくる海の香りとコーヒー豆を挽いた香りが調和し、瀬戸内海の穏やかな風景を眺めながら飲むコーヒーは格別であった。

明日は午前中にも一杯コーヒーを飲もうという話を両親とした。明日もまたコーヒー豆を手で挽いて、朝の平穏な瀬戸内海を眺めながら飲むコーヒーもまた至福さを届けてくれるだろう。今日もまた充実感と幸福感に満ちた一日であった。山口県光市:2019/10/10(木)18:39

5030.【日本滞在記】家族の関係性と絆の深まり

今、夕食後に父が入れてくれた抹茶を家族三人で飲み終えた。抹茶そのものの完成は一時間以上も前であり、夕食時も随分と家族で話をしていたのだが、抹茶を飲みながらも話に花が咲き、自分の部屋に戻ってくる時には午後の8時を迎えていた。今日はまだメールを確認しておらず、これから少し確認をし、返信が必要そうなものに少々返信しようと思う。

今回日本に一時帰国した際に感じたことの中で最も大きなものは、日本という国を受け止める自己のあり方がこれまでとは全くもって変わったことであった。日本という存在の受け止め方、および日本で呼吸することの仕方がまるっきり変わったと言える。それによって、日本から得られる感覚や考えというものも過去7年間のものとは想像もつかないほどに変わった。

どのようなものからどのようなものに変化したのかについては、具体的にここに書くことはしない。それは非常に主観的な感覚であるし、何よりもこれまでの日記の中で具体的すぎるほどにそれを書いているとも言えるからである。そうした変化が起こるまでに7年間ほど欧米で生活をする必要があった。私の場合は、8年目に「それ」が起こった。

そうした大きな変化、そして確かな変化を実感したのが今回の一時帰国であった。それに加えて、今回若干ながら予想(かつ期待)をしていたのは、家族の関係性におけるダイナミズムの変化が起こることである。それが本当に起きた。今回の一時帰国で一番嬉しい変化はそれだと言えるかもしれない。

その大きなきっかけは、実家に戻っての初日の夕食の時に行った5時間におよぶ家族同士での対話を挙げることができるだろう。またそこから今日に至るまでも家族の中でちょっとした対話や、夕食時には必ずゆったりとした時間の中で対話を積み重ねてきた。

確かにこれまでの一時帰国においても対話を重ねてきたし、昔から家族の中で会話は多く行なってきたのだが、それらの積み重ねが家族の関係性に大きな変容をもたらし、家族の絆が一段深まったように思えたのである。先ほど抹茶を飲みながらゆっくりと話をしていた時にもそれを感じたし、そこでの対話もまたさらなる関係性の深化に寄与するものになったはずである。

明日の夕食、そして夕食後に抹茶を飲みながらゆっくりとした対話を楽しみたい。そのようなことを思わせてくれるとても有意義かつ幸せな時間が毎日押し寄せる。寄せては返す波の存在を当たり前だと捉えるのではなく、その存在そのものが奇跡であるということ、そしてその奇跡を今この瞬間に目撃していることもまた奇跡であることをしっかりと受け止めたい。

二重の意味での奇跡が、今自分の家族の中に起こっているということ。それに対して感謝の念を持たない者がこの世にいるだろうか。山口県光市:2019/10/10(木)20:29

5031.【日本滞在記】瀬戸内海を包む闇を眺めながら:今朝方の夢

時刻は午前5時半を迎えた。いつもは4時半に起床していたが、今朝はそれよりも15分ほど遅く、4:45の起床となった。今、暗闇に包まれた瀬戸内海の波の音を聞いている。部屋の窓から外を眺めると、本当に街灯が少なく、共感を引き起こす闇の世界がそこに広がっていることに気づく。

時間はまだ早い、海上の船が何か無線でやり取りをしている声が聞こえてきた。何をしているのだろうか。この時間帯に海上の船から声が聞こえてくるのは珍しい。

今朝方は夢を見ていた。それは、資産運用とボルダリングに関するものであった。夢の中の私は、様々な金融商品を取り上げて、自分のライフサイクルやライフスタイルごとにそれらの金融商品のメリットとデメリットなどを友人に説明していた。私の周りには数人の友人がいて、彼らは資産運用をどのようにすればいいのかを最近考え出したようだった。

資産運用についてこちらから話題を持ちかけたわけでは決してなく、彼らが私の意見を聞きたいと述べてくれたために、私から色々と説明をすることになった。友人たちから話を聞いてみると、一人の友人は資産運用に不可欠なファイナンシャルリテラシーの基礎と投資マインドを持っていた。それら二つのうち片方が欠けていると資産運用はほとんどうまくいかない。大多数の人は両方持っていないというのが実情であり、それを考えると、彼のような存在は稀有であった。彼の持っている知識とマインドセットがあれば、彼は資産運用をうまくやるだろうということが確信された。

資産運用について話をした後、その友人たちと一緒にボルダリングを楽しんだ。資産運用の話も実は、ボルダリングの壁を登った後の休憩時間に行なっており、資産運用の話と休憩がひと段落ついたところで、再び壁を登ることにした。ここでも友人たちは、壁の登り方についてあれこれと私に意見を求めてきた。彼らの質問に対してもできるだけ丁寧に答えようと思ったが、それは考えるまでもなく、丁寧に情熱的に質問に回答している自分がそこにいた。今朝方はそのような夢を見ていた。

時刻はゆっくりと午前6時に近づきつつある。ちょうど先ほど父が海のチェックから帰ってきて、これからオーガニックの野菜と果物を使って酵素ジュースを作ってくれようとしている。6時を過ぎた頃にそれを味わいながら飲む楽しみが待っている。その頃には辺りは明るくなり、穏やかな瀬戸内海の様子を拝むことができるだろう。山口県光市:2019/10/11(金)05:45

5032.【日本滞在記】オーロラのように輝く夕焼け空

時刻は午後6時を迎えた。つい今しがた、オーロラのような夕焼けを見た。家族団欒で夕食を摂っている時、夕焼けが美しいと母が述べ、その言葉をきっかけに、私は玄米の入った茶碗を持って思わずバルコニーに飛び出し、表情豊かな夕焼けを眺めながらご飯を食べていた。それは本当にオーロラのように美しく、時間の経過と共に表情を変え、夕焼けにも生命があるのだと思わせてくれるには十分であった。

シベリウスが湖と白鳥を愛し、それらからインスピレーションを得ていたのと同じように、私は海と空から靈感を得る性向があるのかもしれないと思う。

現在、関東地方に台風が接近している。そのせいもあってか、今日は朝から瀬戸内海が少々荒れていた。そこには普段見せぬ瀬戸内海の様子があつた。遠方の海に台風が存在していることがここまでその余波を伝えていることを興味深く思う。因果の鎖。それは私たちが想像している以上に遠くからやってくる。時間的にも距離的にも、うんと遠くからやってくる。そんなことを思う。

先ほどのオーロラのように輝く夕焼け空をぼんやりと眺めていたのと同じように、実家に帰ってきてからは、一日のうちにぼんやりと瀬戸内海を眺めることが多い。これは本当に大事なことだとつくづく思う。オランダの自宅でも、私はよく空をぼんやりと眺める。今回の一時帰国では、一日の間にぼんやりとする時間をうまく確保することができ、それが習慣になりつつあることは喜ばしい。

確かにオランダは、時間的にも心理的にもゆとりが浸透した国だが、そうした国で生活を継続させていく中で、今よりもずっとぼんやりとした時間を設けていこう。そうした時間の中に佇んでこそ、創造性が養われ、魂の治癒と変容が進んでいくのである。それを忘れてはならない。

今日は午後買い物に出かけ、数年前に知人の方に教えてもらった、ユニクロの「極暖」を購入した。ヒートテックは以前から持っていたのだが、数年前に「極暖」なるものが世に出されていることを知り、寒さの厳しいオランダで生活を続けていくにあたって、今回の一時帰国中にそれを購入したいと思っていた。無事にそれを購入した後、近所の書店に立ち寄り、そこで三冊ほど良い書籍と巡り合う幸運に恵まれた。それらは順に、ドビュッシーに関する書籍、クリムトを特集した芸術雑誌、羽生善治さんに関する書籍を購入である。

オランダにいと、洋書に関しては全てアマゾンを経由して入手しているのだが、日本に一時帰国した際にはできるだけ実際の書店に立ち寄って書籍を購入するようにしている。そして実際に書籍を購入した際には、いつも私は、いつどこで購入したかを書籍の1ページ目に書き込んでいる。今日購入した三冊の書籍は、そうして自分の人生史の中に刻み込まれ、大事な役割を担うことになる。瀬戸内海の風を感じながら、それらの書籍をゆっくりと読んでいこう。山口県光市:2019/10/11 (金)18:23

時刻は午後6時半を迎えた。夕食を食べ終え、ひと段落したので、父が今から抹茶を入れてくれようとしている。

今日は昼食後に、コーヒー豆を私の方で挽き、それを元にしてコーヒーを作り、家族三人で味わった。抹茶に関しては、父が茶を立てて入れてくれる。もうしばらくしたらそれが完成し、ゆっくりとそれを味わいたい。

実家に帰ってきてから、あるいはこれは日本に戻ってきてからすぐに始まっていたことだが、オランダにいる時以上にゆったりと過ごしている自分がいることに気づく。時間の流れが異常に早く、ゆとりを喪失してしまった東京においてもそのように過ごしていた。

東京に滞在していた時は、東京の異常さに対抗してそのように過ごしていたのだろうか。以前の私であればそうだったかもしれない。だが今回は、自然体で東京の中で過ごすことができ、その自然体の中にゆとりが体現されていたのである。オランダでの生活が4年目を迎え、過去3年間に培ってきた時間に対する感覚の変容を見てとる。

今日の午後に、実家の周辺を散歩していた時にも、自分の足取りの一步一步にゆとりが体現されていた。そうした自分の姿を見て、確かな変化が自己に起きたのだと知る。もはやゆとりというものを強調せずとも、それが自己の本質部分にまで浸透していき、自己の本質にゆとりがあると言っても過言ではないところまでやってきた。ここからも継続して、その自己の本質を涵養していこう。それはゆとりを通じて育まれていく。

そう言えば、今日の午後に仮眠を取っていると、二つのビジョンを見たことを思い出した。一つ目のビジョンの中で、私はボルダリングをしていた。厳密には、壁を登る前に、数人の友人と一緒にあって、オブザベーションをしていた。通称「核心」と呼ばれるその課題の難所がどこなのかを見極め、その難所をいかに乗り切っていくかについて友人たちと意見交換をしていた。オブザベーションがひと段落したところで、まずは私が登ってみることにした。その時には、最初から壁を登っていくのではなく、核心の手前から登り始め、核心の攻略法だけを友人に紹介した。そこでビジョンが変わった。

二つ目のビジョンの中で私は、オランダの街を歩いていた。もう3年もオランダで生活をしているのだから、その街がオランダの街であるということを間違えようがない。街を何気なく歩いていると、一階建てのある家に「ヨガスタジオ」という看板が立てかけられていた。その家に近づいてみると、一階の窓ガラスがとても大きく、道から家の中がよく見えた。

どうやら一人のオランダ人女性がそのスタジオを経営しているようであり、彼女はオーナーでありながらも、同時にその家に住んでいるようだった。通り越しに、ガラス窓を通じて家の中を見た時、その女性と目が合い、お互いに微笑んだところでビジョンが終わった。

もうすぐ父が入れてくれている抹茶が完成しそうだ。山口県光市:2019/10/11(金)18:40

5034. 【日本滞在記】直筆に込められた不思議な力を感じる夢

時刻は午前5時半に近づきつつある。今朝もいつもの通り、4時半過ぎに起床した。両親は私よりも少し早く起床しており、二人の活動する音が聞こえ始めた頃に私も目覚めた。起床してみると、父はすでに海の様子をチェックするために自宅を出発していた。もう少ししたら海から戻ってきて、母と私のために、野菜と果物をジューサーにかけて酵素ジュースを作ってくれるだろう。それを飲むのが毎朝大体6時半頃である。

実家に帰ってきてからも生活リズムは規則正しい。生活リズムの安定は、日々の生活に充実感と幸福感を安定的にもたらしてくれている。

台風が関東地方に近づいているというニュースが数日前から流れている。今日は関東地方に台風が上陸するかもしれないとのことである。関東から遠く離れた山口県は穏やかであり、瀬戸内海は昨日よりも穏やかだ。寄せては返す平穏な波の音に耳を傾けながら、今朝方の夢について振り返っている。

夢の中で私は、大学時代のゼミのメンバーの中でも一際仲の良かった友人とメールでやり取りをしていた。今度どこかで会ってゆっくり話をしようというのが趣旨であった。そのメールの中で、会う日時を決め、当日を迎えたところ、待ち合わせ場所に彼はやってこなかった。その代わりに、突然私

は小中学校時代を過ごしたアパートの郵便受けの前に立っており、郵便受けを開けてみると、彼から手紙が届いていた。そしてその他にも、私宛の手紙が別の人たちからたくさん送られていたのである。

手紙には不思議な力がある。直筆で書かれた言葉には、メールなどの電子化されてしまった言葉にはない不思議な力がある。

電子化されてしまった言葉にもある種の霊力のようなものは宿るが、直筆の手紙に込められているそれには叶わない。直筆には言霊の力が真に宿る。手紙の書き手の魂がそこに宿る。そのようなことを思わせてくれる手紙がたくさん届いていた。私は、郵便受けから大量の手紙を取り出し、それを3階の自宅まで持って帰ろうとした。そこで夢の場面が変わった。

今朝方はその他にも夢を見ていたことを覚えている。だがそれらの夢は、瀬戸内海の波の泡沫のように、どこかに消えてしまった。そんな夢たちは、再び寄せては返すを繰り返す。今日という日がやってきたことに感謝の念を持って十全に生きることができれば、その夢はまたやってくるだろう。しかもその時には、一段深い真実を開示してくれるに違いない。山口県光市:2019/10/12(土)05:34

5035.【日本滞在記】瀬戸内海というモチーフ:感覚的未分化の世界の中へ

瀬戸内海。かくも自分の心を安らかにしてくれる海はないだろう。そのようなことをバルコニーでくつろぎながら思った。バルコニーに設置されている木製のテーブルの上にスタンディングデスクを置き、それを用いて読書を行っていた。

午前中に豆を挽いて入れたコーヒーはとてもうまく、瀬戸内海の海風の香りと調和する。父と先日オーガニックのコーヒー豆を選んで本当に良かったと思う。

瀬戸内海の波の音はとて心地良く、そして太陽に照らされた海面の動きの美しさについつい見入ってしまう。瀬戸内海は、いつか自分の作曲上のモチーフになるだろう。少なくとも実家に戻ってきた際には、それを継続的なモチーフにしたい。実家はすでに創作のための別荘となった。それはとて有り難いことである。

今日はこれから本日5度目の作曲実践を行おう。そのまま6度目の作曲実践をした後に、バナナを食べようかと思う。

言葉によって世界が文節化される前の世界に没入一体化することを可能にしてくれる作曲。作曲の魅力の一つはそこにある。日記を書きながら、世界を分節化しながらにしてそれと同一化していく方向性と、曲を作りながら、分節化を逃れた感覚的未分化の世界の中に入り込んでいく方向性の双方を大切にしていく。

今書きながら考えていたのだが、音は確かに言葉にならないものを形にしてくれるのだが、これもある種の分節化なのだろうか。今の私の中では、それは言葉のように世界を分節するというよりも、自己と世界との感覚的な出会いを浮き上がらせるような働きをしているのではないかと考える。ひょっとすると、言葉でもそれが可能なのかもしれない。詩的言語というのはそうした手段なのではないだろうか。

世界を冷徹に切り取るのではなく、世界と自己との出会いを温かく浮き上がらせていくような形で言葉を紡ぎ出していきたい。そのような考えが芽生える。

日記の執筆にせよ作曲にせよ、それらを通じて伝えたいことなど事前に決まっているわけではない。そもそも何かを伝えようと思って言葉や音を紡ぎ出しているわけでもないように思う。ただ純粹に、この瞬間に自己と世界との出会いによって喚起される感覚を形にしているだけなのだ。そのようなスタンスで言葉と音を通じた創造活動に励んでいきたい。

正午に向かう瀬戸内海は穏やかな歌を歌っている。山口県光市:2019/10/12(土) 11:02

5036.【日本滞在記】ヌミノーゼ(聖なるもの)との触れ合い

——なにごとの おわしますかは 知らねども かたじけなさに なみだこぼる——西行法師

今、父が立ててくれた抹茶を飲み終えた。時刻は午後7時半を迎え、満月の前を雲が素早く通り抜けていく。満月が見え隠れする夜の世界の中で、ぼんやりといろいろなことを考えていた。本日は、記録的な台風が関東圏に上陸し、ニュースはその件で持ちきりである。増水し、荒れ狂う川の様子

や災害の状況を見ていると、それは自然が私たちに警鐘を鳴らすような激しい声のように思えてくる。

現代人の生き方やあり方に対する警鐘の声。それは怒号のようであり、多分に戒めの意図が込められているように感じるのは私だけだろうか。

今日の夕方、雲間から差し込む光の筋を見た。それは天から地上にかかる光のレースのようであり、天に続く輝く道のようにも思えた。雲間を縫って天から地上に降り注ぐ光を眺めながら、ドイツの神学者ルドルフ・オットーの『聖なるもの』を読んでいた。本書は偶然にも父の書棚にあったものであり、これは父が購入したものなのか、私が購入したものなのかよくわからない。いずれにせよ、本書に自然と手が伸びた自分がいたことは確かである。

本書の中でオットーは、「聖なるもの」を「ヌミノーズ」という言葉で表現している。こうした聖なるものへの畏怖の念が魂の成長に不可欠な養分になる、ということをルドルフ・シュタイナーが述べていたことを思い出す。今回の実家の滞在期間中に、オットーの書籍やシュタイナーの書籍を読み返している自分がいたのは、偶然かつ必然のように思えてくる。

本当に最近によくヌミノーズを知覚する体験を多くする。それは覚醒意識の中だけではなく、夢を含めた無意識の中でも起こる。オットーは、「予覚 (divination)」という興味深い能力を提唱している。これは、聖なるものが出来事や人物などを通して自己表現したもの、すなわち顕在化した聖なるものを真なるものとして認識し、承認することのできる能力である。私の中でこの能力が開発され、さらに大きく発現されているのを日々感じる。ヌミノーズに触れる体験、すなわち聖なるものに触れる体験を頻繁にしている自分に気付いている。

まで行われていたオンラインゼミナールと先日到大阪で行ったセミナーに参加して下さったある方と、一昨日ボルダリングを山口県で楽しんだ際に、その方は私がよく感極まって涙を流す理由について尋ねて下さった。その答えはまさに、聖なるものに触れる体験にあるように思う。おそらくそれ以外には考えられない。

冒頭の西行の言葉は、「なんだかよくわからないが、大変有り難いという思いが湧き上がり、自ずから涙がこぼれてくる」というような意味だろう。まさに、日常の些細なことに対してこうした体験をして

いるのが今の自分である。理性的に全く理解できないが、逆にそうだからこそ自分の内側の奥深いところに触れる何かがあり、それによって感涙する。そんな体験が寄せては返す波のように日々の生活の中で絶えず起こっている。家族との会話、愛犬との戯れ、家族との夕食など、そうしたありふれた事柄を通じて聖なるものがやってくる。明日もまた聖なるものとの出会いが待っている。山口県光市:2019/10/12(土)19:39

5037.【日本滞在記】今朝方の夢:充実感の予感

時刻は午前5時半を迎えた。今朝の瀬戸内海はすこぶる穏やかであり、波の音が大変心地良いリズムを刻んでいる。魂のリズムもそれに呼応するかのように脈動している。

自然のリズムと自分の内側のリズムを調和させる生き方。それがほぼ意識せずとも行われている。こうした生活が実現されたことを嬉しく思い、これからはその調和をより一層深めていこう。

父が毎朝の習慣としている海のチェックから帰ってくるのはもう少し先だろう。海のチェックから帰ってきたら、母と私のためにすぐさま新鮮な野菜と果物を使った酵素ジュースを作ってくれる。毎週日曜日は父にとって断食の日なのだが、それでも私たちにジュースや夕食を作ってくれることを有り難く思う。午前中のコーヒーを父に入れてもらうのは申し訳ないため、コーヒー豆を自分で挽いて、母の分も含めて自分でコーヒーを入れよう。

瀬戸内海の波の音を聞きながら、今朝方の夢について思い出している。いくつかの断片的な夢を見ていたのを覚えている。夢の舞台は日本であり、おそらく幼少時代を過ごした場所だったのではないと思う。そこで友人たちといろいろな話題について話をしてきた。そのうちの一つにボルダリングがあり、もう一つは芸術関係のものだったと覚えている。芸術関係の話をしていると、ある若い女性の画家が目の前に現れて、その方は私たちに彼女が作った作品について説明してくれた。その方は終始笑顔であり、大変好感を持った。そのような夢を見ていたのを覚えている。夢から覚めると、自分の内側に暖かく、肯定的なエネルギーが流れていた。

今日は午後から4人の親友と一緒にボルダリングをする。私が育った光市室積という場所にボルダリング施設とカフェが一体になった施設がある。カフェからは瀬戸内海を眺めることができるようであり、素晴らしい立地にあると思う。親友の一人に二人目の子供が生まれたという嬉しい知らせを少し

前に聞いており、その女の子の顔を見るためと、三年前にはまだ赤ちゃんだった長女の成長ぶりを見るために、その親友の家に少し立ち寄りさせてもらうことになった。親友との久しぶりの再会と、彼らと一緒にボルダリングを楽しむことを含めて、今日もまたとても充実した一日になるだろう。山口県光市:2019/10/13(日)05:53

5038. 【日本滞在記】父が描いた海の絵：花火の風情にさらされて

時刻は午前6時に向かっている。今日の山口県も天気が良いとのことである。昨日は関東に歴史的な規模を持つ台風が襲来した。この時期に台風がやってくるというのは珍しいように思え、その被害も大きいことが心配される。我が国の自然災害のリスクは昔から極めて高いのだが、それにしてもここ最近はそうした災害が多いように思えてならない。それは我が国に対する自然からの警告なのだろうか。

一つの波が浜辺に寄せ、それは大海に帰っていき、再び新しい波が浜辺にやってくる。無限に続く波の運動が今この瞬間にも行われている。その運動の痕跡として残される波音に静かに耳を傾ける。瞑想的な気分の中で耳を傾ける。そうすると、普段聞こえてこない音まで聞こえてくるかのようだ。

物理的・物質的な音だけではなく、精神的・魂的な音を聞き取ろう。そうした音は存在しているのだし、それを聞き取ることも可能なのだ。今後は、そうした音を自分の曲の中に具現化させていこう。早朝の瀬戸内海の波は、その方向性を示してくれている。

先ほど父が海のチェックから帰ってきて、今、野菜と果物をふんだんに使ったジュースを作っている。実家に戻ってきてすぐに、自分の部屋の前の壁に、父が昔描いた絵が飾られていることに気付いた。昨夜は改めて二枚の絵をゆっくりと眺めていた。そのうちの一枚が海をモチーフにしており、二艘のヨットが穏やかな海に浮かんでいる姿を描いている。この海はどこなのだろうか？瀬戸内海のように思えなくもないが、父にちょっと聞いてみようということを昨夜思っていた。

父にとっても海というのは大切な存在なのだろうか。私にとって海はとても大切な存在であり、私の名前の「洋」という漢字は海を想起させ、自己の本質の一部には海が持つ本質があるように思える。

そうしたことを考えていると、海というのは私にとって魂のモチーフなのかもしれない。また、私は空もとても好きだ。

空の持つ解放感、そして自由。それらの特徴は海が持つものとも似ているが、当然ながら異なる感覚を喚起してくれる。空も私にとって魂のモチーフだと言える。

昨夜、幼少期を過ごした室積のみたらい湾の花火を父の部屋で見た。私は花火が始まっていることに気付いていなかったのだが、父が私の部屋のドアをノックし、花火が行われていることを教えてくれた。そこからは父と一緒に花火を見ることにした。この時期に花火が見えるとは思っておらず、大きな幸運に恵まれたと思った。

実は夏の季節には、実家の目の前の虹ヶ浜で大規模な花火大会があり、それはバルコニーから楽しむことができる。過去に私も何度かそれを見る幸運に恵まれた。その花火と比べると、室積の花火は規模が小さいが、それでも風情を感じた。季節外れの花火に感じた風情は、日本の風情である。今、「風情」という漢字を書いてみたときに、風にも情があるのだと改めて気付かされた。そして風が持つ情は、私たちにまた特別な情を喚起してくれるのだと思った。

私たちの内側の世界は、どこまでも外側の世界とつながっていることを忘れてはならない。山口県光市:2019/10/13(日)06:10

5039.【日本滞在記】意外性:テオリア・プラクシス・ポイエーシス

時刻は午前10時を迎えた。気がつけば、日本に滞在できる日数も後4日となった。今回の一時帰国は、合計で3週間ほど日本に滞在していた。幸いにも、滞在期間中は天気にも恵まれ、一度岐阜で一時間ほど折り畳み傘を差す時間があっただけであり、その他の日は晴れていた。

今日の山口県の天気は快晴であり、それは秋晴れと形容していいほどに見事である。瀬戸内海はすこぶる平穏であり、海の上を小鳥の群れたちが飛び去っていく光景はどことなく恍惚感を引き起こした。

私が先ほど出会った鳥たちは、どこかへ向けて出発した。ドゥルーズ的な発想に基づけば、出会うとは再会することであり、出発することは再来することだ。先ほどの小鳥たちとの出会いは、私の魂の人生史においては再会なのだろう。そして、彼らの出発は私にとっての出発でもあり、それは同時に彼らと私にとっての再来なのだ。その確からしきは揺るがない。揺るがしようのないものである。

先ほどまで、バルコニーで読書をしていた。今日は父が断食をしているため、父にコーヒーを入れてもらうのも気が引けたので、私がコーヒー豆を挽き、母の分も含めてコーヒーを入れることにした。

およそ35年間ほど料理や家事に専念してくれた母が少しでもピアノ演奏に集中できるように、父も私もできる限りのことをしている。それでいて、父も私も好きなことに従事できていることの幸せを思う。

香り立つコーヒーをバルコニーのテーブルに置き、スタンディングデスクを使って読書をしていると、母のピアノ練習の音が聞こえてきた。どうやらベートーヴェンのピアノソナタを練習しているようだった。今、母はもっぱらベートーヴェンのピアノソナタとバッハの前奏曲を練習している。母の演奏に耳を傾けていると、ベートーヴェンのピアノソナタの曲の終わりで、少々弾き間違いがあった。

母はその箇所を何回も弾き直し、楽譜通りの和音を鳴らそうとしている。だが私は、その弾き間違いによって生まれた和音が面白く、バルコニーから部屋に戻り、「今どうやって弾いた？」と思わず声をかけた。弾き間違いというのも生モノらしく、もう再現することはできないとのことであったが、あえて音を外し、その調性にはない和音を活用することの意外性に関心を持った。こうした意外性をぜひとも自分の曲の中に盛り込んでいきたい。

アリストテレスが述べていたように、想い(テオリア:観相)、実践(プラクシス)し、創造(ポイエーシス)することを大切にしていこう。それらを三位一体の実践統合体とみなした日々を送っていこう。

今から数曲ほど作った頃に昼時を迎え、友人がボルダリングのために車で迎えに来てくれる。そのときに、彼の二人の子供と会えることが今から楽しみだ。

世界が目の前の瀬戸内海のように平穏であることをただただ願う。世界が残酷さを突きつけても、祈ることをやめはしない。

祈り、実践し、創造すること。それを愚直なまでに継続していこう。そうすれば、自己は瀬戸内海のようになり、それを超越した存在に変容していこう。山口県光市:2019/10/13(日)10:24

5040.【日本滞在記】今朝方の夢:親友たちとボルダリングを楽しんで

時刻は午前4時半を迎えようとしている。快眠のおかげもあり、今朝は4時に起床した。

今、列車が最寄りの駅を通過していく音が聞こえてきた。この時間帯の光市はまだ闇に包まれており、一日の始まりを静かに待っている雰囲気を出している。

幸いにも今日も天気にも恵まれるようであるから、読書はできるだけバルコニーで行いたい。作曲と読書を交互に行うことは、二つの実践に相互作用をもたらす、両者が共に良い関係性の中で進められていくのを感じている。オランダに戻ってからも、両者を往復することをより意識してみよう。その際には、まだ読みかけの和書を読むことを自分に許容してみよう。

オランダに戻ったからといって、和書を読むことに引け目を感じたり、それを禁止したりする必要はないのである。今回の一時帰国を通じて、もはや日本語空間との付き合い方の要諦を掴んだのだから、オランダで日本語に触れることに対して心配する必要はない。

今朝方は起床前に夢を見ていた。そこには、小中学校時代で一番背の高かった友人(YK)が現れていて、彼と何かを話していた。彼はジョギングをしながら自分のところにやってきたのを覚えている。私の目の前で立ち止まり、笑顔で何かの話題について楽しそうに話しかけてきた。

その話題はスポーツ関係のものだったか、投資関係のものだったように思う。二つの分野は全く違うのだが、今の私にとっては両者の区別はさほどなく、夢の中でどちらの話題が取り上げられていたのかをうまく思い出せないのはそのためだろう。どちらかというと、スポーツの話題を彼は話していたように思える。そこから何名かの女性友達も話に加わってきて、ボルダリングについて和気藹々と会話をしていた。そのような夢を今朝方見ていたのは、昨日に親友4人と一緒にボルダリングをしたからだだろう。

私が幼少時代を過ごした室積にある「室積BASE(ベース)」さんに行き、そこでボルダリングを楽しんだ。一昨日は花火大会が近くで行われており、昨日も祭りが行われているようであったから、ジムのカフェは普通に利用できたが、ボルダリング施設の利用は15時からであった。

ちょうどみんなと待ち合わせをしていたのが13時であり、そこから2時間はお互いに積み積もった話をして旧交を温めた。地元にあるジムだから鼻屑目に見ているわけでは決してないが、今回の一時帰国の中で訪れたジムの中で一番雰囲気の良いジムであった。

課題がより多いジムはその他にもあったが、非常にお洒落なカフェがジムの中にあり、Meetupスペース(あるいはワーキングスペース)もあり、2階には瀬戸内海を眺めることのできるテラス席もある点がこのジムの良さである。カフェのテーブルや椅子、ボルダリングスペースの椅子のほとんどが木材で作られていることも、落ち着きを与えてくれることにつながっていたように思う。

私たちは2時間ほど会話を楽しみ、そこから2時間半近くボルダリングを楽しんだ。もうほとんどの友人には家族がおり、お互いに全く違う人生を歩んでいるが、こうしてゆっくりと話をし、一緒にスポーツを楽しんでいると、昔に戻ったかのような気持ちになるから不思議である。来年もまたこの時期に地元に戻ってこようと考えているため、ぜひまたみんなとボルダリングを楽しみたいと思う。山口県光市:2019/10/14(月)04:48